

「左派」農民運動指導者の戦中・戦後

——旧全会派の場合

横関 至

はじめに

- 1 旧全会派指導者の戦時下の動静
 - 2 戦後農民運動と旧全会派指導者
 - 3 社会党・共産党における旧全会派指導者
- おわりに

はじめに

本稿は、全国農民組合全国会議（以下、「全会派」と略記）の指導者の戦中・戦後の動静を探ることによって、戦前の「左派」農民運動の指導者と戦後農民運動および社会党・共産党との関わりを検証することを課題としている。本稿は、拙稿「全農全会派の解体」（法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』625号，2010年11月。以下，法政大学大原社会問題研究所を「大原社研」と略記）を前提として作成されたものであり、「左派」農民運動における戦前と戦後の「継承と断絶」の問題を探る試みの一環をなすものである⁽¹⁾。

検討に際しては、戦前・戦中（戦時下）・戦後という三区分別を設定して、戦中（戦時下）と戦後の動向との関連を検討していく。「戦前と戦後」の対比というだけでは、戦中（戦時下）の時期の独自性が看過されてしまうからである。戦前とは日中戦争開始までの時期であり、戦中（戦時下）とは1937年の日中戦争開始から敗戦までの時期を指している。

農民運動史研究においては、戦時下の分析を等閑視して戦前と戦後を比較対照する傾向があったために、戦時下の行動と戦後の行動との関連についての具体的分析は遅々たる歩みであった。こうした研究動向のなかで、戦時下の農民運動指導者の動静についての岩村登志夫氏と有馬学氏の一連の研究は貴重な成果であった⁽²⁾。しかしながら、岩村氏も、有馬氏も、戦後の動静との関連で検

(1) 戦前の「左派」農民運動には、労農派によって担われたものと、全会派によって担われた2つのものが存在した（拙稿「労農派と戦前・戦後農民運動」上下、『大原社会問題研究所雑誌』440号，442号，1995年および前掲拙稿「全農全会派の解体」（『大原社会問題研究所雑誌』625号，2010年11月）。

(2) 岩村登志夫氏の「戦時体制下の農民運動—兵庫県農民連盟の成立—」（尼崎市立地域研究史料館『地域史研究』

討することはされていない。ところで、共産党の活動に参加していた人々の戦時下の動静を探る必要性については、伊藤隆「戦時体制」（中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門』東京大学出版会、1977年）が先駆的指摘をしている。「昭和8年（1933）前後の日本共産党の大量転向、それがひきおこした全運動にわたる大量転向後の、共産党員やそのシンパ層が、どのように広く運動のなかで生きのびたかの分析も必要である」（同上、95頁）、「先きののべたような戦中の経験をもった人びとが、戦後獄中18年組と一緒に日本共産党の再出発の重要な構成部分となっている。彼らの戦中体験が戦後の日本共産党に何らの影響をも与えていないとは考えられない。プラス・マイナスを含めて戦中の体験が戦後日本共産党に何を遺産として残したのかも興味深い問題の1つであろう」（同上）と。さらに、伊藤隆氏は「旧左翼人の『新体制』運動—日本建設協会と国民運動研究会—」（『年報・近代日本研究5 昭和期の社会運動』山川出版社、1983年。以下『年報・近代日本研究5』と略記）においては、「党員および同調者（シンパ）」のうち「昭和10年代の諸運動、とりわけ新体制運動に関連して活動した人も少なからず存在することが知られている」（同上、260頁）として、その分析の必要性を説かれていた。水平運動史研究では、戦時下についての研究が進んでいる。なかでも、朝治武『アジア・太平洋戦争と全国水平社』（解放出版社、2008年）は、全国水平社の消滅過程を戦争との関わりに着目して解明した注目すべき研究である（拙稿「杉山元治郎の公職追放（上）」『大原社会問題研究所雑誌』589号、2007年、参照）。ここでは、全国水平社の中央幹部として、松本治一郎、朝田善之助とともに、上田音市と野崎清二の戦中・戦後について詳細に検討されている。ただ、上田と野崎が「左派」農民運動としての全会派の指導者でもあったことについてはほとんど言及されていない。

1 旧全会派指導者の戦時下の動静

まず、旧全会派で共産党主導のあり方を批判し総本部復帰運動を展開した人々の動静をみていこう。田辺納、長尾有、羽原正一は、全農を解体し大日本農民組合を結成しようとする動きを批判し、大日本農民組合には参加せず、日本農民連盟に加わり、田辺納は社会大衆党から離党した（拙稿「大日本農民組合の結成と社会大衆党」『大原社会問題研究所雑誌』529号、2002年参照）。後に、田辺、長尾、羽原は中野正剛の東方会に参加した⁽³⁾。田辺は、翼賛選挙に立候補したが落選し、

6巻3号、1977年）と有馬学氏の一連の研究は貴重な成果であった。有馬氏は、「東方会の組織と政策」（九州大学文学部『史淵』114号、1977年）、同「日中戦争期の『国民運動』—日本革新農村協議会—」（前掲『年報・近代日本研究5』）、同「史料紹介・田辺納関係文書—昭和13年の全農分裂問題を中心に—」（前掲『不惜身命—田辺納の素描—』）、同「1930年代の全農福佐連合会と水平社」（『季刊 部落解放史・ふくおか』50号、1988年6月）、同「解説・日中戦争期における社会運動の転換と田辺納」（『日中戦争期における社会運動の転換 農民運動家・田辺納の談話と史料』海鳥社、2009年）等々を発表されている。なお、森武磨・大門正克編著『地域における戦時と戦後—庄内地方の農村・都市・社会運動』（日本経済評論社、1996年）は貴重な試みである。

(3) 東方会に参加した農民運動関係者の氏名については、前掲有馬学「東方会の組織と政策」参照。なお、羽原正

市議として活動した。かつての全会派常任全国委員で新本部確立運動の指導者であった石田樹心は、人民戦線事件で検挙された。憲兵司令部「昭和13年11月 主要左右翼運動者関係者名簿」によれば、「同11年5月公務執行妨害罪により懲役5月に処せらる、同13年福佐連合会執行委員長となり活動中同13年2月検挙6月上旬治安維持法違反として起訴審理中」であった（荻野富士夫編・解説『15年戦争極秘資料集 補巻3 思想彙報Ⅱ』不二出版、1997年、721頁、以下『思想彙報Ⅱ』と略記）。近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』（日外アソシエーツ、1997年）には、「38年2月に人民戦線事件で検挙され、以後3年3ヶ月下獄した」、「出獄後の戦時中の動向は不明」と記されている（1巻、244頁。木永勝也氏執筆）。大日本農民組合に関与したのが、西納楠太郎と町田惣一郎である。西納楠太郎は、1937年7月6日の全農第2回中央委員会で中央委員を辞任している（大原社研編『農民運動資料12号 戦時体制下の農民組合（6）』1978年、42頁）。1937年『土地と自由』154号（1937年7月25日）は、佐野争議で責任を問われての離脱と説明している⁽⁴⁾。前掲、憲兵司令部「昭和13年11月 主要左右翼運動者関係者名簿」によれば、「昭和12年5月横領罪被疑者として全農府県幹部2、3名と共に検挙せられ取調の結果、指導闘争資金保管中一千73円43銭を横領したること判明起訴審理中」（前掲『思想彙報Ⅱ』785頁）とある。1939年4月28日の大日本農民組合西日本協議会には、西納は大阪府連の代表として参加している（『特高月報』1939年5月）。1942年の翼賛選挙では、笹川良一の国粋大衆党より大阪3区から出馬予定とみなされていた（警視庁特高第2課「総選挙に対する革新陣営の動向」1942年、吉見義明・横関至編集・解説『資料日本現代史4 翼賛選挙1』大月書店、1981年、203頁）。実際には、西納の出馬はなかった。町田惣一郎は、憲兵司令部「昭和13年11月 主要左右翼運動者関係者名簿」には、「同11年4月社大党に加入すると共に全農全会派及同本部派の合同の為奔走しあり」（前掲『思想彙報Ⅱ』798頁）と記載されている。1936年4月26日には、長野県社会運動者懇談会に出席している。他の出席者は、林虎雄（社会大衆党）、野溝勝（社会大衆党）、鷲見京一（全農）等であった（青木恵一郎『改訂増補 長野県社会運動史』巖南堂書店、1964年、416頁）。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、1937年に長野県須坂町議に当選し、1938年には大日本農民組合長野県連合会主事となった（4巻、303-304頁。安田常雄氏執筆）。1939年2月には、羽生三七とともに国民運動研究会長野県準支部を結成した（前掲、伊藤隆「旧左翼人の『新体制』運動」『年報・近代日本研究5』288頁。なお、この論文では、町田の全会派での活動には言及されていない）。1941年12月8日に、「文化運動（いはひば関係）」

一の場合、「激闘の農民運動とその敗北」（現代史の会編集・発行『季刊現代史』5号、1974年）では、東方会参加について言及しているが、『農民解放の先駆者たち』（文理閣、1986年）では、東方会参加について触れていない。塩田庄兵衛編集代表『日本社会運動人名辞典』（青木書店、1979年、455頁）も、前掲『近代日本社会運動史人物大事典』（3巻、939-940頁。林宥一氏、執筆）も、戦時下の東方会参加については、言及していない。なお、岩村登志夫氏の追悼文（「兵庫県農民連盟と羽原正一」『歴史と神戸』35巻5号、1996年）によれば、「『日本社会運動人名辞典』の羽原さんの項を私が執筆した」が、「長尾さんの項では触れながら、羽原さんの項では、ご当人たってのご意向に背きにもならず、兵庫県農民連盟にかかわる事実が割愛してある」（同上、32頁）。

(4) 田辺納は、聞き取りのなかで、西納が「スパイ」といわれていたと発言している（前掲、有馬学『日中戦争期における社会運動の転換 農民運動家・田辺納の談話と史料』86頁）。

として、「いはひば主幹 宮崎茂」らとともに、「古物商 町田惣一郎」が検挙されている（『特高月報』1941年12月分、12頁）。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』には、「羽生三七、林広吉らと国民運動研究会に参加したが、41年太平洋戦争開始とともに検挙され、一年半予防拘禁された」（4巻、303-304頁）と記されている。青木恵一郎は「満州協和会地方工作員」となり後に中国に渡ったとされているが、中国での動静は不明である⁽⁵⁾。有馬学「日中戦争期の『国民運動』—日本革新農村協議会—」（前掲『年報・近代日本研究5』187頁、注52）では、青木の戦時下の行動について、「但し、昭和10年代の動きについては、自身が全く語っていないこともあって、不明の部分が多い」と評されている。

次に、共産党農民部と全会派フラクの面々の動向をみていこう。農民部員であった伊東三郎（宮崎巖）については、公判の際の帝国更新会思想部主事の小林杜人との関係が注目される⁽⁶⁾。1935年3月の伊東の公判について、小林杜人は「私は在廷証人として宮崎の転向を保証した（当時の裁判には証人として出廷するのが私の任務であった）」（小林杜人『「転向期」のひとびと』新時代社、1987年、77頁）、「たしか懲役5年を求刑されたが、結局、猶予になって出獄し、一時は郷里に帰り、花むしろの祖父の業をついで事業家になった」（同上）と回想している。『特高月報』によれば、刑務所を出所した伊東三郎と平賀貞夫は「多数派」の宮内と連絡をとった。「昭和10年中相踵いで刑務所を出所せる宮崎巖（元党農民部長）、岡部隆司（元党第二無新フラクキャップ）、風早八十二（元党情報部員）、平賀貞夫（元党組織部長）等は、合法生活を保ちつつ客観的及び主観的情勢の推移に付き情報を交換し自らグループを為すに至れり、時偶々同年末保釈出所せる『多数派』中央委員長宮内勇は此のグループに接近し『多数派』結成事情に関し釈明する所あり」（『特高月報』1941年4月分、4-5頁）。伊東（宮崎）、平賀、宮内は、1930年代初頭の時期から『農民闘争』、全農全会派で共に活動していた間柄であった（前掲拙稿「全農全会派の解体」）。伊東らは、コミンテルンから派遣された小林陽之助と連絡をとって共産党再建にあたった。「昭和11年7月国際共産党より密命を帯びて帰国せる小林陽之助（昭和12年12月2日京都府検挙）は前記叔父小林輝次を

(5) 塩崎弘明「革新運動としての『協同主義』運動」（前掲『年報・近代日本研究5』136頁）には、「青木はその後満州協和会さらには全中支合作社に関係する」と記されている。日本革新農村協議会（革農協）の中央指導部の一員としての青木については、有馬学「日中戦争期の『国民運動』—日本革新農村協議会—」（同上、166頁、168-169頁、186-187頁）参照。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、「38年北勝太郎らと産業組合を背景とした日本革新農村協議会を結成、翌年には中国にわたり岡崎嘉平太を幹事長とする中支合作社の幹事となり、敗戦を迎えた」（1巻11頁。村上安正氏執筆）。ただ、岡崎嘉平太伝刊行会編『岡崎嘉平太伝—信はたて糸愛はよこ糸—』（ぎょうせい、1992年）には、「岡崎嘉平太を幹事長とする中支合作社」についての言及はない。なお、岩村登志夫「兵庫県農民連盟と羽原正一」（『歴史と神戸』35巻5号、1996年、38頁）には、「1938年6月から7月にかけての1か月ほど」満蒙移民視察団として出かけた羽原正一と長尾有についての記述のなかに、「長尾さんが帰途の上海で話合う満鉄調査部の旧全農全会仲間、青木恵一郎氏や平賀貞夫氏」と記されている。青木と平賀は満州協和会に関与していたが、「満鉄調査部」に所属していたかどうかは今後の検討課題である。

(6) 帝国更新会は1926年に「起訴猶予者・執行猶予者の更生保護団体」として大審院検事の宮城長五郎と教誨師の藤井恵照によって創立され、1931年12月から思想犯転向者の保護事業を開始し、1934年12月に帝国更新会に思想部が設置され、小林杜人が「思想部の責任者・主事」となった（小林杜人『「転向期」のひとびと』新時代社、1987年、28-30頁）。

頼り日本共産党への連絡を求め、唯一残留者長谷川博と会見し、宮崎巖、岡部隆司等とも連絡する」（『特高月報』1941年4月分、5頁）。岡部隆司、長谷川博、宮崎等は東京の歯科医泉盈之進方に会合して、「小林陽之助の提議に係る」「方針を決定し」た（『特高月報』1941年4月分、5-6頁）⁽⁷⁾。1937年12月に小林陽之助が検挙された後には、伊東は熊本県に「逃避」した。「第一次党再建指導部は昭和12年12月の小林陽之助検挙後身辺の危惧を感じずるに至り、其の対策を寄々協議せるが、陽之助と第一に接触し、而も合法生活を保ちつつある宮崎巖は最も検挙を恐れ、昭和13年7月熊本県に逃避せり」（『特高月報』1941年4月分、14頁）。「昭和13年3月下旬より熊本市にありて同地方プロレタリアエスペランチスト市原梅喜を中心とする熊本県宇土エスペラント会を指導する等の活動をなす」（『特高月報』1942年2月分、48頁）。1940年9月3日に、「党再建関係」で検挙された。職業欄には、「熊本市雇隣保館勤務」（『特高月報』1940年9月分、13頁）と記載されている。伊東の熊本市隣保館勤務については、山口隆喜が次のように回想している。「私は、14年の8月か9月には熊本市役所社会課軍事扶助係に採用され、翌年の夏頃には岩尾氏も宮崎氏も相次いで社会課に勤務することになった。ただしこの2人の勤務は市役所ではなくて本荘隣保館で、2人とも同和関係の仕事だったと思う」（『伊東三郎さん！宮崎巖さん！』渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編『伊東三郎高くてかく遠くの方へ—遺稿と追憶』土筆社、1974年、345-346頁。以下『伊東三郎』と略記）。また、小林杜人の回想によれば、「検挙当時は熊本の市役所に勤めていたと思う。警視庁に検挙されたあと、東京拘置所に収容されていたので、差し入れや裁判を手伝っていたが、出所して戸塚の更新会に来たときは、胸の病が悪化していて、玄関に上がるのもやっとというほど衰弱しており、しばらくのあいだ、私のところで静養していた。そのときは公子夫人は熊本にいたと思う」（前掲『「転向期」のひとびと』80頁）。後に、妻の郷里の熊本県で戦時下を過ごした⁽⁸⁾。伊東と同時期に共産党農民部員であった小崎正潔は、『京城日報』の記者をしていた。「昭和7年3月末に、私も伊東も埴谷もやられて、そのあとはお互いにバラバラになり、出獄後、私は朝鮮にいて京城日報の記者をやったりしましたが、そのころ一度伊東が私を訪ねてきたことがあります」（小崎正潔「伊東三郎回想」、前掲『伊東三郎』351頁）。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』では、「32年検挙され、豊多摩刑務所に2年半入所。出獄後、中華ソバ屋などを営み、やがて朝鮮に渡り、約3年間、平壤毎日の記者として働く。大戦勃発後帰国し理研産業に勤務」と書かれている（2巻、574頁。笠井忠氏執筆）。共産党農民部長であった赤津益造については、前掲『近代日本社会運動史人物大事典』には、「37年出獄、40年日本建設協会に入会して農村部長になった」（1巻、36頁。栗木安延氏執筆）と記されている。前掲、伊藤隆「旧左翼人の『新体制』運動」

(7) 1936年7月には、伊東は長谷川博、岡部隆司とともに、コミンテルン帰りの小林陽之助と東京の歯科医泉盈之進方で会合した（前掲『「転向期」のひとびと』78頁）。なお、『特高月報』では、小林が出席したかどうかや会合の時期は明記されていない（1941年4月分、5頁）。

(8) 1944年時点での見聞が渡辺宗尚「宮崎さんと熊本の農民運動」（前掲『伊東三郎』431頁）に記されている。「宮崎さんにはじめてお会いしたのは敗戦の色濃い1944年であった」、「場所は宮崎さんのお宅で、たしか熊本市の東郊、渡麓あたりだったと思う」、職場の同僚で宮崎夫人の叔父さんに当たる人の私用で伺ったところ、「宮崎さんはそのとき庭先におられ、近くのくいに山羊が一頭つないであった」、「あとでわかったのだが、当時の宮崎さんは当局の厳しい『保護観察』のもとで、戦局の推移を内心必死に追跡しておられたのである」。

(『年報・近代日本研究5』271頁)によれば、1939年7月時点で日本建設協会の常任理事であった。

次に、全会フラクの面々をみていこう。般若豊(埴谷雄高)は、1940年に遠坂良一、宮内勇のいた雑誌『経済情報』に加わり、1941年には宮内勇、遠坂良一、大竹武雄とともに雑誌『新経済』を創刊し、敗戦まで関わりをもった(埴谷雄高「跋」、宮内勇『1930年代日本共産党私史』三一書房、1976年、231-232頁)。杉沢博吉については、内務省警保局保安課『特高外事月報』1938年4月分、18頁の「左翼転向者等の満支進出問題」という記事のなかで、「今回又左翼転向者等を以て組織するアジア自治協会会長松岡松平等左記13名は大本営軍属として採用せられ、4月19日長崎発上海丸にて渡支せり」とあり、「杉沢博吉(東京)」の名が記載されている。1940年時点で、「蘇州軍特務機関員(軍属)(社会民衆部主任)」であった(「在中支特別要視察人調査表」、奥平康弘編集・解題代表『昭和思想統制史資料』第22巻、紀伊国屋書店、1981年、306頁)。相馬勝義は、1934年10月5日に検挙された(『特高月報』1935年4月分、1頁)。憲兵司令部「昭和13年11月主要左右翼運動者関係者名簿」によれば、「日本共産党中央奪還全国代表者会議準備委員会の結成を見るや昭和9年同党技術部員として入党活動中検挙せらる。昭和11年秋田県に転居全農秋田県連中央部協議会幹部として」活動、「昭和12年12月人民戦線派一斉検挙に際し検挙せられ目下審理中」(前掲『思想彙報Ⅱ』765頁)と記載されている。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、41年出獄後は山形県大和村産業組合嘱託となり、「44年以降山形県農業会企画室主事、農地課長、農政課長等を歴任した」(3巻、138頁、栗木安延氏執筆)。平賀貞夫は、『特高月報』によれば、「昭和8年10月検挙せられ昭和10年11月7日東京刑事地方裁判所に於て懲役2年4年間刑執行猶予の判決を受けたるも依然として転向せず」(『特高月報』1941年9月分、15頁)とみなされており、「昭和11年6月頃より元党員宮崎徹及び岡部隆司と共に党再建指導部を結成し自ら農民部を担当、当面全国農民組合の組織化によりて、左翼農民運動の統一を図るべく当時大阪、東京等各地全大会に出席し散在せる同志との連絡に努め或は栃木、新潟等の全農組織に対し左翼的立場より指導」(同上)した。さらには、「コミンテルンより帰国せる小林陽之助と連絡して岡部隆司、長谷川博、風早八十二等を右小林に紹介し、或いは岡部、平賀、風早等と相謀りて党農民部員たりし関矢留作の遺稿出版に関する諸般の運動に従事」した(『特高月報』1942年2月分、48頁)。1937年12月の小林陽之助検挙後、1938年に「満州国に逃避」した。『特高月報』は、「宮崎と最も交渉深く、日本共産党中央奪還全国会議準備会の中心人物宮内勇より其の下獄前引継を受けて農村組織に着手しつつありたる平賀貞夫は、全農書記河合徹の昭和13年2月頃仙台に於て検挙せらるるや、之又甚しく身辺危険となり伝手を求めて満州国協和会に就職し、宮崎と前後して満州国に逃避せり」(『特高月報』1941年4月分、14頁)と記している。この満州国協和会への就職について、小林杜人は1938年夏に「平賀貞夫から満州国協和会に就職することについて相談を受けて協力した」(前掲『転向期』のひとびと』74頁)と記している。1940年7月28日、「党再建関係」で検挙されたが、そのときの職業欄には「満州国協和会職員」と記されていた(『特高月報』1940年7月分、9頁および1941年9月分、15頁)。小林杜人の回想によれば、「そのうちに、満州国から警視庁に検挙連行されてきて、彼から私に連絡があったので面会した」(小林杜人『転向期』のひとびと』75頁)、「やがて裁判を受け(島野武が弁護してくれた)実刑になって、下獄したが、

病を得て悲運にも不帰の客となった」（同上）。松本三益は、共産党再建グループに関与し、ゾルゲ事件との関わりも指摘されている。『特高月報』によれば、東京の歯科医泉盈之進方で会合した小林陽之助と岡部隆司、長谷川博、宮崎巖は、「守屋典郎、松本三益、石黒周一、小岩井淨等関西の活動分子を介し」小林陽之助のもたらした新運動方針を「諸方に散在せる共産主義者に伝達せしめたり」（『特高月報』1941年4月分、5-6頁）、「岡部隆司は昭和12年7月石黒周一が木材通信社大阪支局長となるや、松本三益と協同して大阪地方に党再建運動を展開すべく依嘱せり」（同上、13頁）。1938年9月より1940年の検挙まで、松本は『機械工の友』大阪支所の責任者であった（吉田健二「雑誌『機械工の友』と『機械工の知識』（1）」『大原社会問題研究所雑誌』425号、1994年4月、25-26頁）。1940年8月11日に検挙された（『特高月報』1940年8月分、39頁）。しかし、学歴・職業欄とも記載がなく空白であった⁽⁹⁾。1942年3月に「起訴留保、保護観察」（松本三益『自叙-松本三益』自叙-松本三益刊行会、1994年、341頁）となった。1942年8月より東京に住むが、同月妻（平良ツル）が検挙され「2ヶ月拘留され不起訴」（同上）となった。松本は東京と大阪を行き来して共産党再建に関与したりゾルゲ事件関係者の周辺に出没していたが、軽い処罰ですんでいる⁽¹⁰⁾。

共産党多数派の中核となった宮内勇は、1934年10月に検挙され、1935年5月病監へ移され、上申書を提出して1935年12月に保釈され、1936年12月に下獄し、1939年11月に仮出所となった（宮内勇『1930年代日本共産党私史』222-226頁。『特高月報』1941年4月分、5頁には、「同年末保釈出所」とある）。前述のように、宮内は伊東三郎、岡部隆司、風早八十二、平賀貞夫のグループと連絡をとっていた（『特高月報』1941年4月分、4-5頁）。1940年、遠坂良一のいた雑誌

(9) この点、佐藤正『日本共産主義運動の歴史的教訓としての野坂参三と宮本顕治』上（新生出版、2004年）96頁参照。ゾルゲ事件と真栄田三益との関わりを検討してきた佐藤氏は、次のように指摘している。「警視庁が検挙した128人のうち、学歴、職業とも空欄になっているのは松本三益（真栄田三益）だけである。松本三益を真栄田三益と別人のように見せかけるための苦心の跡と思われる」、「いずれにせよ、『特高月報』（1940年8月分）は真栄田三益の名前をのせていない」と。

(10) 松本三益の言動については、安田徳太郎『思い出す人びと』（青土社、1976年）237-284頁、守屋典郎の安田批判「『聞き書き』と戦前史の真実-安田徳太郎氏のあやまりを正す」（『文化評論』1976年6月号）、渡部富哉「伊藤律スパイ<定説>の崩壊」（三著出版記念講演会実行委員会編『野坂参三と伊藤律-粛清と冤罪の構図』社会運動資料センター、1994年）、佐藤正『日本共産主義運動の歴史的教訓としての野坂参三と宮本顕治』上（新生出版、2004年）等を参照されたい。なお、加藤哲郎「ゾルゲ事件の新資料」（日露歴史研究センター『ゾルゲ事件外国語文献翻訳集』25号、2010年3月）では、米国での公開資料に基づいて、川合貞吉がゾルゲ事件摘発の発端は伊藤律ではなく松本三益であると証言していたことが紹介されている。また、同「戦後米国の情報戦と60年安保」（『年報日本現代史』編集委員会編『年報日本現代史』15号、現代史料出版、2010年）では、川合貞吉のゾルゲ事件摘発は「ウイロピー、キャノン機関の協力者としての活動の一部であった」（同上、65頁）と指摘されている。小林杜人の回想によれば、「昭和17年も後半期になっていたと思う。日時は正確には覚えていないが、松本<三益>は警視庁から釈放されて帝国更新会思想部に来た」（前掲『「転向期」のひとびと』53頁）、「松本が執行猶予になり、釈放されてから間もないころと思うが、神奈川県二宮町にいた高倉テルが上京して、私に相談に来た」（同上、53頁）、「『奥の座敷に、貴方と関係のある松本三益がいるから会いなさい』といったら、高倉は驚いていたが、松本と久しぶりに会うと『ここに元凶がいる』と叫んで笑っていた」（同上、54頁）。

『経済情報』に加わり、1941年には般若豊、遠坂良一、大竹武雄とともに雑誌『新経済』を創刊し、敗戦までその雑誌に関わっていた（埴谷雄高「跋」、前掲宮内勇『1930年代日本共産党私史』231-232頁）。1941年3月7日に「党再建関係」で夫婦とも検挙された（『特高月報』1941年3月分、6頁）。職業欄には、「新経済情報編集長」と記載されていた（同上）。種村善匡（本近）は、1935年10月に検挙され、1936年6月に起訴された（『特高月報』1936年6月分、17頁）。戦時下の動静について、種村善匡『善匡歌集 軌跡』（善匡歌集刊行会、1982年）313頁所収の「著者略歴」はつぎのように記している。「昭和13年新聞記者志願して、新愛知新聞社（現中日新聞社）に入社。長野県政記者として活動中、病魔に倒れ、家郷にて病臥生活4年間、軽快ののち、中野の信州杞柳製品卸商業組合に勤務。一時僧門入りして、下高井郡穂波村塞沢常心寺住。新愛知新聞社の同僚の回想によれば、新愛知新聞社の長野支局に勤務していた（前掲『善匡歌集 軌跡』11頁）。隅山四郎（四朗）は、多数派で活動していた時期に種村善匡と国谷要蔵から「スパイ」嫌疑を受け、多数派の運動から切られた（前掲「座談会多数派の運動とその時代」、『運動史研究』1号、46-48頁）。1935年7月1日に検挙された（『特高外事月報』1935年12月分、7頁および1936年6月分、10頁）。隅山の回想によれば、「警察でも市ヶ谷でも信じ込んでいた多数派から裏切られたことを深刻に悩んだのだから。もっとも活動中はそういう印刷物も見なければ、警察での取調べの時にも見せられたこともないんだ。お前は種村と国谷の2人から連絡を切断されたんだ、という程度の話しか聞いていないんだよ」（前掲「座談会 多数派の運動とその時代」、『運動史研究』1号、48頁）。1940年時点で、隅山は「産青連全国連合の幹部」となっていた（隅山四朗追悼集刊行委員会編集・発行『隅山四朗追悼集 土を愛して』1984年⁽¹⁾）。妻の隅山きよみの回想「わが夫隅山四郎のこと」によれば、1941年12月8日に検挙された（同上、53頁）。鈴木六郎「隅山四郎さんに思う」には、「昭和17年頃だったか、産組中央会の課長級の連中が治安維持法で警察に連行される事件が相次いでいた」、「彼もまた当局に連行された」（同上、14頁）と記されている。1944年には釈放されており、鈴木六郎の結婚式に出席するため福島県に出かけている（同上）。

次に、1933年、34年時点で全会派の運動から身を引いていた元幹部の動静を、みていこう。全会派委員長であった上田音市は、前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、「三重県下の共産主義運動関係者152人を検挙したいわゆる3・13事件で連行され、12月に起訴留保で釈放」となり「34年7月、全農三重県連合会委員長を辞任」、1937年社会大衆党より立候補したが落選し、「39年には融和団体三重県厚生会の理事に就任」、「40年には部落厚生皇民運動に加わり、大政翼賛会のもとでは翼賛壮年団松阪支部本部長などの役職に就いて活動した」（1巻、451頁。黒川みどり氏執筆）。伊藤隆「旧左翼人の『新体制』運動」（前掲『年報・近代日本研究5』273頁）によれば、1939年7月に日本建設協会の理事となっている。朝治氏の前掲『アジア・太平洋戦争と全国水平社』324-326頁によれば、上田は三重県伊勢表未整理品工業組合連合会理事長をつとめ、

(1) 鈴木六郎「隅山四郎さんに思う」（前掲『隅山四朗追悼集』13頁）。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』では、産業組合青年連盟全国連合会常任幹事をつとめたと記されている（3巻、89頁。林宥一氏執筆）。なお、小林キジ編著『産業組合中央会思想事件（長野事件）の全貌—旧産青連運動史の一齣』（全購連労働組合中央情報部、1954年）の「付表（2）」には、「農村協同体建設同盟」の一員として、隅山の名前が記載されている。

1941年7月に松本治一郎を社長として設立された日本新興革統制株式会社に関与していた。全会派常任全国委員であった若林忠一は、1933年10月に農民運動からの「引退」声明を発表した後、「満州国」に渡り満州日々新聞論説委員、支局長をつとめ、1945年6月に帰国し東京支社に勤務した（若林忠一遺稿追悼誌刊行委員会編集発行『若林忠一遺稿追悼誌』1981年、69-70頁）。全会派常任全国委員であった野崎清二は、前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、「36年まで3年間獄中にあり、36年出獄後、38年全国水平社常任中央委員を務めた。40年8月、朝田善之助らと部落厚生皇民運動をすすめ、同全国協議会を結成、理事長となったが全国水平社から除名処分を受け、同12月に解散した」、1942年の翼賛選挙に立候補したが、落選し、1943年に『『聖戦完遂と同和問題の根本的解決私見』を発表した」（3巻、838-839頁。坂本忠次氏、執筆）。伊藤隆氏の前掲「旧左翼人の『新体制』運動」（『年報・近代日本研究5』271頁）によれば、1939年7月に日本建設協会の常任理事となっている。朝治武氏の前掲『アジア・太平洋戦争と全国水平社』は野崎の動静を詳細に検討している。

このように、旧全会派指導者の戦時下での行動は4つに大別される。1つは、中国や「満州」で、そして国内で、様々な形で戦争遂行に関与した人々の存在である。満州国協和会の平賀貞夫・青木恵一郎、軍の特務機関員の杉沢博吉、満州・朝鮮で新聞社勤務の若林忠一・小崎正潔、日本建設協会の常任理事であった赤津益造、日本建設協会理事で翼賛壮年団松阪支部本部長の上田音市、日本建設協会常任理事で部落厚生皇民運動を推進した野崎清二、大日本農民組合の西納楠太郎と町田惣一郎、東方会に参加した田辺納、長尾有、羽原正一であった。2つめとして、国内の雑誌社、新聞社で働くことで生計を立て情報を入手しやすい場所にいたのが、旧全会フラクの宮内勇と般若豊、種村善匡であった。3つめは、共産党再建に関わり検挙された伊東三郎、平賀貞夫のうち、伊東は検挙後病が重く妻の郷里で戦時下を過ごし、平賀貞夫は獄死した。4つめは、松本三益、青木恵一郎、石田樹心ら戦時下の動静が不明である人々の存在である。

2 戦後農民運動と旧全会派指導者

敗戦から治安維持法撤廃までの時期に、全会派委員長であった上田音市は戦争協力への反省から戦後の運動参加を躊躇しており、全会派常任全国委員で新本部確立運動の指導者であった石田樹心は特高主任に「陛下の為め」の学問をするという手紙を出していた。

上田音市は、1945年8月15日の午後に、遠藤陽之助と駅の近くの踏切で偶然に出会って「これからおれたちの時代だ」と話し合い、翌16日には、旧水平運動指導者であった大阪の松田喜一を訪問している（三重県部落史研究会『解放運動とともに 上田音市のあゆみ』三重県良書出版会、1982年、249-250頁）。9月15日に日本社会党結成準備会より入党の招待状が郵送され、9月22日に開催される準備委員会への出席依頼状が「送達」されてきた（1945年9月26日付の内務大臣、東海北陸地方総監への三重県知事の報告、粟屋憲太郎編『資料日本現代史 3』大月書店、1981年、128頁）。これに対する上田の意向は、次のように記されている。「自分トシテハ戦争勃発以来兎ニ角戦争一本デ進ンデ来テ居リ、軍官ニ対スル協力モ真剣ニヤツテ来タ。敗戦後ノ思想ハ再ビ戦

前ノ社会様相ニ還元スルニ至ツタガ、戦争中軍官ニ協力シテ来タ手前直ニ馳セ参ズル訳ニハ行カナイシ、又今後ノ推移ヲ看取セナケレバ態度ヲ決スルコトハ出来ナイノデ、近ク上京シ中央ノ情勢ヲ充分把握シテ態度ヲ決スルツモリデアル。然シ自分ガ社会党ニ参加スルナラバ、戦争中軍官ニ対シテ協力シテ来タコトニ対シ同志ヨリ批判ト制裁ハ免レヌガ甘ンジテ受ケル覚悟ヲセネバナラヌ…云々」(同上)。このように、上田は戦後の運動に参加する場合には戦争協力に対しての「批判ト制裁ハ免レヌ」と考えていた。これは、かつての社会運動指導者が自己の戦争責任について言及した数少ない例である⁽¹²⁾。

石田樹心は、9月13日に鳥栖署特高主任宛に次のような書簡を出している⁽¹³⁾。「先日は失礼致しました。情勢は着着かざるが如くして着着いた形です。命運と諦めて大勇猛心を出した上での日本人の覚悟よりするならば、勿論突破途上の出来事に過ぎませんが、人情として堪難い事は戦争犯罪人としてあげらるる方々の事です。我々の道義観より論ずるならば喧嘩両成敗でなければなりません、負ければ賊軍の世の習いに口惜とも残念でたまりません、'学問も陛下の為にす、これこそ日本的学問である。日本的学問にして始めて国家のためになり、世界の文運に貢献するのである」、
「小生は今度塾を開いて英語を教へやうと思ひます。名は亜細亜書院と付けます。」「何か届出でも形式があれば教へて下さい。また了解があるなら書かして下さい。やがてこの塾は松下村塾に次ぐ心算です。如何の嵐に抗しても。此の手紙は今村部長にも見せて下さい。必要の為他の人にも宜しく9月13日特高室にて」(前掲『資料日本現代史 3』119-120頁)。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、石田の「出獄後の戦時中の動向は不明だが敗戦後、一時社会党に参加、その後共産党に転じた」(1巻, 244頁。木永勝也氏, 執筆)。なお、1946年の総選挙に立候補して落選しているが、党派は「諸派」に分類されている(公明選挙連盟編集・発行『衆議院議員選挙の実績—第1回~第30回』1967年, 495頁。職業は「塾長」)。

全会派常任全国委員であった若林忠一は、1945年8月28日付の妻宛の手紙のなかで、次のような情勢判断を書いている。「今後の日本を想い、深く考えさせられます。明治体制を基調とした日本でなくなることは確かです。この敗戦を契機として、どんな新生日本が誕生するか極めて興味のある問題です。禍を転じて福となす。ここに始めて大衆の幸福を基調とした新国家が育成されて行くことと思ひます」(前掲『若林忠一追悼誌』71-72頁)。若林は、独自政党結成の動きを示した。種村善匡の回想によれば、「昭和21年ごろ」若林が種村の家に訪ねてきて、『『独立社会党』の旗揚げを語り、私と一緒にやらないかと提議したのだった。が、私はすでに、私がむかしから信奉し、所属する党と農民運動の再建、拡大に入っていて、若林兄とは政治的に全く見解を異にしたので、むしろ友人として、その翻意を促したのだった」(同上, 243頁)。若林は、後に社会党に参加した(前掲『若林忠一追悼誌』, 小林勝太郎『社会運動回想記』郷土出版, 1972年)。そして、日本農民組合長野県連の農地改革推進委員会委員長、生産確保闘争委員会委員長として、のちには県農地委員会会長代理として農地改革に取り組んだ(前掲『若林忠一追悼誌』74-76頁, 244

(12) このことは、功刀俊洋氏が前掲、粟屋憲太郎編『資料日本現代史 3』432-433頁の解題で指摘された。

(13) 治安維持法の怖さを知っていればいるほど、戦後の立ち上がりは遅れたといえよう。戦時体制と戦後との継続を強調する論においては、治安維持法撤廃のもった意義が軽視されている。

頁)。全会派常任全国委員であった野崎清二は、部落解放運動の中心人物となった（前掲『近代日本社会運動史人物大事典』3巻, 839頁）。

総本部復帰運動の指導者町田惣一郎について、1945年10月1日付の内務大臣への長野県知事の報告（「無産政党結成ヲ繞ル左翼分子ノ動向ニ関スル件」、前掲『資料日本現代史 3』144頁）は、「県内在住旧全農全会系分子タル 共乙 林広吉共甲 町田惣一郎等ニ依ル新策動認めラルル状況ニシテ、去ル21日、前記林方ニ同人及町田並ニ神奈川県鎌倉居住ノ文芸評論家小林秀雄草元社社員小林茂等参集シ之ガ打合せヲ為シタル形跡アル等」と記している。1946年4月の第3回長野地方党会議では、「林広吉氏、藤森成吉氏、同志高倉テル、町田惣一郎ニ依テ各民主主義団体ニ呼ビカケルト共ニ共産党トシテ社会党長野県支部連合会ニ呼ビカケル」（「第3回長野地方党会議決議録」6-7頁、大原社研所蔵、山崎稔文書）ことが決められた。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、「戦後は45年10月、長野自由懇話会の結成に参加し、12月には共産党に入った」（4巻, 304頁。安田常雄氏、執筆）。前掲、小林勝太郎『社会運動回想記』485頁では、「戦後入党して黨員となった」、「彼の同僚や後輩のうちには国会議員になった者もいるのに、彼は共産党の一市議員に甘んじた」、「戦後彼が党の財政のために負担した額は相当なものに達していた」と記している。数十年来の友人の種村善匡は町田について次のように詠んだ。「名求めずかげの功績光る人農民運動先駆けの友」（前掲『善匡歌集軌跡』259頁）。

総本部復帰運動の指導者青木恵一郎は、中国から帰国後、日本農民組合の事務局で活動した。前川正一宛の1946年4月26日付の葉書（大原社研所蔵）には、「小生事4月2日一同無事帰国」、「大西君とは数回会い色々状勢をうかがいました」と記されている。また、同年8月6日付の葉書（同上）では、「小生先月から日農本部に来て大西君と2人で頑張り始めました」と書かれている。1948年には、社会党と共産党との対立が激しくなっていた日本農民組合長野県連の大会で「社会党が委員長に溝上正男氏、書記長に青木恵一郎氏を推し」たが、「両派の決戦投票」の結果、「投票では共産党系の勝利となり」、青木は落選した（前掲『若林忠一追悼誌』77頁）。後に社共合同運動の時期に共産党に入党し総選挙に立候補したが、落選すると共産党を離れた（前掲、小林勝太郎『社会運動回想記』374頁, 376頁）。

復帰運動の指導者であった西納楠太郎は、戦後の農民運動には関与しなかった。1948年8月22日付の前川正一あての戦後初の手紙（大原社研所蔵）では、次のように書いている⁽¹⁴⁾。「小生早くから政治的能力に自己不信の状態でありまして、知友諸君の活躍を希求しつつ、自分はただ生計を得るためにあくせく無事に消光している次第であります。さて小生現在従兄弟の経営している化学工業（ミルクカゼインを原料としてラクトロイドを作っている）に協力しているのであります」と。

東方会に参加した旧全会派のうち、田辺納は社会党に参加し大阪府で農民運動を展開していたが、公職追放となった（田辺納追想録刊行委員会編集発行『不惜身命—田辺納の素描』1986年, 499-500頁, 所収年譜）。長尾有は兵庫県で共産党の活動に参加し、羽原正一は戦後の農民運動

(14) 前掲『日本社会運動人名辞典』（青木書店、1979年）でも、前掲『近代日本社会運動史人物大事典』（林有一氏執筆）でも、西納について「1941ころ」死去したとしているが、誤りである。

には関与せず、医療運動を展開した（前掲『近代日本社会運動史人物大事典』）。

次に、1930年代共産党農民部の人々について見ていこう。伊東三郎は妻の実家のある熊本県に疎開していたが、戦後は同地で農民運動、共産党の活動に参加した⁽¹⁵⁾。上京した後、「農民運動研究会という国際派の組織」をつくり「会の経営・編集両面にわたって献身的に働いた」（一柳茂次「解説」栗原百寿著作集編集委員会編『栗原百寿著作集』6、校倉書房、1981年、265頁）。1950年11月7日に機関紙『農民運動』が創刊された（同上）。一柳茂次氏によれば、この会は「党本部で農民関係の仕事をしていた私たちや旧農業会の党員が伊東を中心に集まった」（同上）もので、「伊東三郎を中心に結成された農民運動研究会という国際派の組織」（同上、264頁）で、「第5号はついに出版できなかった。しかし組織は国際派の解体するまでつづいた」（同上、265頁）。なお、伊東がゾルゲ事件に関与していたとの風評があった⁽¹⁶⁾。小崎正潔や赤津益造は、戦後は農民運動に関与しなかった。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』によれば、小崎は戦後は病院事務長となった（2巻、574頁。笠井忠氏執筆）。赤津は「敗戦後、1953年中国人俘虜殉難者忍霊実行委員会に加わり、日中友好運動に挺身、日中友好協会（正統）の副会長をつとめた」（同上、1巻、36頁。栗木安延氏執筆）。

全会派フラクの構成員であった人々のうち、般若豊は埴谷雄高の名前で作家活動に専心した。松本三益は共産党の中央幹部に就任した⁽¹⁷⁾。杉沢博吉は富山県で社会党の県幹部となった（前掲『近代日本社会運動史人物大事典』）。相馬勝義は日本文化厚生農協連、日本購買農協連に勤務し、1956年より日本農業機械化協会に属した（同上）。

多数派の指導者宮内勇は、戦後の共産党には参加しなかった（拙稿「日本農民組合の再建と社会党・共産党」上（『大原社会問題研究所雑誌』514号、2001年9月、参照）。種村善匡は、前掲「著者略歴」（『善匡歌集 軌跡』313頁）によれば、「21年還俗して、長野に転任、再び農民運動に参加。日本農民組合中央委員同長野県連常任として活動」した。この点について、元全会派本部書記の服部知治は「旧友の歌集刊行を喜び」と題する文章のなかで、「あなたは僧籍に転じて、本名を善匡と改名。敗戦となるや、ただちに地元の農民運動の先頭にたち、まもなく自坊を去って、長野県の農民を基盤にして、日本農民組合の職業的な活動に専念する」と記している。種村は、若林忠一から新党結成の誘いを受けたが、「私はすでに、私がむかしから信奉し、所属する党と農民運動の再建、拡大に入っていた」（前掲『若林忠一追悼誌』243頁）。埼玉県の古参活動家で多数派とも関わりのあった田中正太郎の回想によれば、種村は1946年2月に開催された共産党第5回大会で多数派について質問をしている。「長野県地方委員会代議員種村基近が多数派問題の徹底的究明の必要を発言したが、徳田書記長はそんな問題を討議する大会でないとい蹴された」（田中正

(15) 山口隆喜「伊東三郎さん！宮崎巖さん！」（前掲『伊東三郎』343-348頁）、山里桃一「伊東三郎氏の熊本時代」（同上、425-430頁）、渡辺宗尚「宮崎さんと熊本の農民運動」（同上、431-435頁）。

(16) 大島清の回想によれば、伊東の葬儀の後で河合秀夫、下坂正英と喫茶店で話をしたときに、河合が「伊東君がゾルゲ事件で何かいまいましい役割をしたという人がいるらしいが、彼はけっしてそんなことのできる人ではないです」と話した（「サンチャンと南京豆—伊東三郎追憶—」、前掲『伊東三郎』298頁）。

(17) 旧全会派の指導者が戦後農民運動の中央指導者にならなかったなかで、例外的に松本三益は共産党の中央幹部、農民運動指導担当者に就任した。松本三益が何故そうした地位に就任したのかは、今後の検討課題である。

太郎「埼玉県の多数派と農民運動」『運動史研究』3号、1979年2月、159頁）。種村は、1946年4月13日に開催された「第3回長野地方党会議」において、遠坂寛、山崎稔とともに長野地方委員会の常任委員に選出され、「地方委員会ノ人民戦線ノオルグ」として「任命」された（前掲「第3回長野地方党会議決議録」）。同日の長野地方委員会では、地方委員会の教育宣伝部長、機関紙部担当となった（「長野地方委員会決議録」、前掲山崎稔文書）。共産党中央機関誌『前衛』に「長野県における民主戦線」（『前衛』第1巻10・11号、1946年11月）、「長野県における民主戦線（続）」（『前衛』15号、1947年5月）、「農民運動の現状批判」（『前衛』29号、1948年7月）を発表した。種村は日本農民組合長野県連本部に「県連常任として常駐」して活動し、生産確保闘争の際には県連の岩田健治書記長と共に占領軍から出頭命令を受けた（前掲『若林忠一追悼誌』75頁、243頁）。1947年7月の日農中央委員会で、「本部は第2回大会の決議を忠実に実行せよ、大会決議を再確認しその実行を確約せよ」と発言し「賛否両論が沸とうした」（日本農民組合機関紙『日本農民新聞』1947年7月25日号）。1948年5月の日農中央委員会では、政党支持の問題で岡田宗司常任中央委員に質問している（日本農民組合機関紙『日本農民新聞』1948年6月10日号）。その際、岡田より「種村氏らによつて嘗て長野県に北陸協議会が招集されたが長野県連自体はこれを知らなかつた、またその協議会によつて供米ストが行われたがこれは日農の方針と反したものであつた」と反論されている。また、社会党機関紙『社会新聞』116号（1948年8月18日）の「共産グループ素描」では、「日農グループを地方に拾うと長野の種村善匡、神経質なスタイリストで自ら謀將をもつて任じている」と記されている。なお、前掲「著者略歴」（『善匡歌集 軌跡』313頁）には、共産党の県幹部であったことについては何等言及されていない⁽¹⁸⁾。「昭和24年、運動の第一線から退いて、昭和25年6月郷土地方ローカル紙、信越時報を創刊した」（前掲『善匡歌集 軌跡』309頁）。1981年時点での肩書は、「長野県新聞協会顧問」であつた（前掲『若林忠一追悼誌』244頁）。隅山四郎（四朗）は、日本協同組合同盟や農業復興会議、農業会民主化闘争にかかわつた⁽¹⁹⁾。農業復興会議をつくる際には、全国農業会と日本農民組合の「書記長の西俊夫さんなどとの連絡役の1人」として活動した⁽²⁰⁾。のちに、日本農民新聞社を創立した。

(18) 何故、多数派の活動家であつた種村善匡が戦後共産党の県幹部に就任しえたのであろうか。その経緯は不明である。小林勝太郎によれば、種村は後に共産党から除名された（前掲、小林勝太郎『社会運動回想記』379頁）。

(19) 渋谷定輔によれば、「隅山四朗君と私が直接生身で出会つたのは、敗戦直後に創立された日本協同組合同盟（会長賀川豊彦・委員長鈴木真洲雄。現日本生活協同組合連合）だつた。私とその常任中央委員で組織局長をしていたとき隅山君が入つてきた。彼には主として『農協』関係を担当してもらつた」、「『経済復興会議』と『農業復興会議』の幹事であつた私の活動に、身を入れて協力してくれたのも彼であつた」（『「農民闘争」と『農業復興会議』』前掲『隅山四朗追悼集』9頁）。

(20) 全国農業会の食糧局にいた小林繁次郎の回想によれば、「われわれが農業復興会議をつくろうと駆け廻つていたとき、どういふ因縁からだつたか今は定かでないが、折衝相手の日本農民組合、とくに書記長の西俊夫さんなどとの連絡役の1人に隅山君がいた。したがつてそんな経過から、隅山君には農復発足当初の情報部長をつとめてもらうことになつたのだつた」（『隅山君との出会い』、前掲『隅山四朗追悼集』18頁）。隅山は、1952年に日本農民新聞社の創立に関与し、後に社長となつた（前掲『隅山四朗追悼集』）。

3 社会党・共産党における旧全会派指導者

日本農民組合再建、社会党結成の一翼を担ったのは、労農派であった⁽²¹⁾。さらに、旧全会派の人々も社会党に参加した。他方、各県、各地域には戦前からの農民運動指導者で共産党員であった人物が存在していた。1930年代共産党の農民部の指導者であった伊東三郎は熊本県で共産党再建、農民組合結成の活動を展開していた。しかし、戦後共産党は各地域で活動していた旧活動家を結集し意見を集約した上での組織づくりはなされず、これら運動現場の人々の知恵と経験を結集した指導部構成とはならなかった（拙稿「戦後農民運動の出発と分裂」法政大学大原社会問題研究所・五十嵐仁編『「戦後革新勢力」の源流』大月書店、2007年）。戦後共産党の農民運動指導は神山茂夫、伊藤律が担当しており、戦前・戦時下の運動の体験を有する幹部があたっていなかった。このことが、日本農民組合を否定する組織方針を提起した原因の1つと推察される（同上）。後に、全会フラクの構成員であった松本三益が共産党中央部の農民運動指導にあたるが、松本は戦前・戦時下の農民運動に実際に参加した経験を有してはいなかった。これに対し、旧全会派の運動体験を有した人物は中央指導部に登用されなかった。戦後共産党は旧全会派が掲げていた農民委員会方針を提示したが、それは農民組合否定論と結びついたものであった（同上）。農民組合内部の反対派としての旧全会派の精神を継承したものではなかった。共産党の場合には、「左派」農民運動との断絶の要素が大きいといわざるをえない⁽²²⁾。

多数派に関与していた宮内勇は、共産党から非難の対象とされた。多数派の指導者であった山本秋は共産党に復帰するにあたって、かつて多数派の活動を共に展開した宮内勇への批判を公表することを求められた⁽²³⁾。この自己批判論文（山本秋「鉄の規律と大衆的統一え」共産党中央機関誌『前衛』37号、1949年4月）において、山本は宮内を批判した⁽²⁴⁾。多数派に参加した者のなかで「入党の意思をもつ者は、私を最後として、すでに、みな党に吸収されている」（『前衛』37号、45頁）、「ただ1人、宮内勇が、今日もなお、否、今日にいたつていよいよ、ハッキリと裏切者の正体をあきらかにし、新経済社々長として、あるいわ財界方面に出入し、あるいわ、社会党右派と、さらには、社会党左派と通じ、あるいわ三田村、細谷などの裏切者と手を結び、公然、陰然の反共反

(21) 前掲拙稿「労農派と戦前・戦後農民運動」上下（『大原社会問題研究所雑誌』440号、442号、1995年）および前掲拙稿「戦後農民運動の出発と分裂」（法政大学大原社会問題研究所・五十嵐仁編『「戦後革新勢力」の源流』大月書店、2007年）、前掲拙稿「全農全会派の解体」（『大原社会問題研究所雑誌』625号、2010年11月）参照。

(22) 戦後共産党が旧全会派の経験の何を継承し何を受け継がなかったのかについては、前掲拙稿「戦後農民運動の出発と分裂」で検討した。

(23) 山本秋「多数派と私の立場」（運動史研究会編『運動史研究 1 小特集「多数派」問題』三一書房、1978年）および同「戦前最後の中央委員袴田里見は栄光だったか」上下、『現代と思想』36号、37号、1979年）。

(24) 後年の座談会で、宮内は山本の自己批判の内容に衝撃をうけたと山本を前にして語っている。「秋さん、君が戦後まもなく『前衛』に多数派について自己批判をのせたことがあったね。あれは僕にとっては当時さうとうシヨッキングなものだったんですよ。あれを出すときには、実は秋さんから事前に連絡があって、ある程度了解していたんです。ところが何度も書き直しさせられてああいふ形のものになった。心ならずも強制された自己批判と僕は見ているが……」（「座談会 多数派の運動とその時代」『運動史研究』1号、三一書房、1978年、33頁）。同席していた山本は、この宮内の問いかけに何等の応答もしなかった。

党策謀に余念がない」（同上），「一たびは歴史を廻す歯車の一歯とならうと自負していた一人の男が，大衆から離れて資本家陣営に身をゆだね，自己批判のかわりに自我意識を固執し，温い同志たちの幾たびかの復党勧告をしりぞけて，自ら歴史に背く悲劇の主人公だと公言し，永久に裏切り去ったことにたいし，大人気なく憤激するかわりに，一掬の同情をおくつて，訣別の言葉としよう」（同上）。多数派の活動家であった隅山四朗については，妻隅山きよみの回想が残されている。「四朗が戦前の非合法時代に多数派という分派活動をしたということでそれは事毎に問題にされたのです」（「わが夫隅山四朗のこと」，前掲『隅山四朗追悼集』55頁）。

おわりに

本稿は，次の3点を明らかにした。1つは，戦時下において旧全会派の活動家は国内，植民地，「満州国」，中国において戦争推進のための活動に従事した。この時期の自己の行為について明らかにしている者は少なく，ましてや自己の行為を反省することを表明した者は稀であった。上田音市の自省は極めて稀な事例であった。2点めは，共産党「再建」に関わったとして検挙された旧共産党農民部の伊東三郎（宮崎巖）と旧共産党組織部長で全会フラクの平賀貞夫のうち，平賀は獄死し伊東は妻の郷里熊本県で逼塞した。伊東は，戦後も熊本県で農民運動，共産党に関与したが，農民組合本部や共産党中央部での指導的地位には就かなかった。3点めは，戦前の「左派」農民運動と社会党，共産党との関わりについてである。全会派内部で総本部復帰運動を推進し全農総本部に復帰した人々と全農総本部の中核を占めていた労農派の人々は，社会党，日農の活動に加わった。戦後共産党は，戦前共産党の農民部で活動し戦時下の共産党「再建」に関与して検挙された伊東三郎や多数派の指導的幹部であった宮内勇を，中央幹部として遇しなかった。

以上の3点から，労農派と全会派によって担われていた戦前「左派」農民運動の伝統を人材と組織の面で継承していったのは社会党であり，共産党は戦前「左派」農民運動の経験を継承する要素が少なかったことが明らかとなった。

（よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）